誰もが自分らしくあるために

弘前市立第五中学校　八木利菜

最近〝多様性〟という言葉をよく耳にするようになった。人種、年齢、価値観や国籍、宗教や性別、障がいの有無などの違いを互いに理解し、尊重し合うことが大事だと価値づけられている。

二〇二一年夏、コロナ禍による一年の延期を経て、東京オリンピック・パラリンピックが開催された。アスリートたちの熱闘とともに注目を集めたのが、前回大会から二倍増しになった男女混合種目と、ＬＧＢＴ選手の活躍である。アスリートが声をあげたことは大きな意味があり、スポーツ界が〝多様性〟を受け入れていく上で、大きな前進となった大会で記憶に新しい。

本の表紙に「いつだって、自分の好きな自分らしい自分でいたい！」という強い意思表示がされていた。自分が自分らしくあるためにはどうしたらよいのだろうか。

ＬＧＢＴとはレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの頭文字をとった呼び名である。性的少数者ともいわれている。主人公のリヴは、自分の抱えている違和感を探っていくうちに〝トランスジェンダー〟という言葉に行きあたる。身体的には女の子で、周囲からも女の子として認識されているが、リヴは自分自身を本当は男の子だと思っている。家族や友達に真実を打ち明ける難しさを感じる中で「女子の制服はスカート」という校則を変えようと闘っていく物語である。

性的少数者に対する配慮から、教育現場も少しずつ変わってきている。弘前市内の中学校でも女子の制服の選択肢が増え、スカートの他にスラックスも選べるようになった。私は、スラックスだと自転車をこぐときも楽だし、冬はスカートよりも暖かいから良いなと思った。「欲しければ買ってあげるよ」と親に言われた。しかし、自分だけだったらと考えると、スラックスには抵抗がある。周りが私をどう見るのかも気になる。だから「いらない」と断った。制服でない服装だったら自由に自分の好きな服装ができるのに、制服は「みんな同

じ」という考えが邪魔をして、自分の考えをなかったことにしてしまった。

私は勝手に性的少数者の人は、自分の周りにはいないと思っていた。そしてどこか他人事で、性的少数者の人たちは特別な人たちだという感覚でいた。しかし、調べてみると、日本では約七人に一人が性的少数者であるという衝撃の数字を知った。これは、左利きや血液型がＡＢ型の人と同じくらいの割合だそうだ。私の周囲に性的少数者の人がいないのではなく、私が「気付けていない」だけかもしれない。

リヴは自分の抱えた違和感を「サイズのあわない靴を履いているようで、窮屈で締め付けられている感じ」と表現している。私は、そんな思いを抱えている仲間を、知らず知らずのうちに傷つけてしまっていたかもしれないと感じた。性的少数者約一万人を対象にした調査では、約六割が小中高時代にいじめに遭い、約二割が不登校を経験したとの結果もある。中には自分自身を刃物で傷つけた人、自殺も考えた人もいるという事実を初めて知った。私は正しい知識を身に付けていないにも関わらず、理解者であるように装いながら、無意識のうちに差別をしてしまっていると思う。「知らなかった」では済まされないと思うと胸が締め付けられる。

自分の言動を振り返ってみると、数の多い方に気持ちが引っ張られている気がする。「普通は」という言葉は、言い換えれば「多数派は」と話しているともいえる。また、少数派を否定しているともいえる。自分を安心で安全なところに置くことで、自分の気持ちを誤魔化し、周囲に合わせていた自分がとても恥ずかしい。

自分らしく生きるとは、自分の気持ちに正直になること、周囲に流されずにやりたいことを自らで選んで生きていくことだと私は考えている。リヴが自分らしい自分であるために正しいと思った行動を貫く、力強い姿をとても尊敬できた。そして、リヴがトランスジェンダーだと知っても変わらず優しく接してくれた友達、「リヴが幸せでいることが一番の願いだ」と受け止めてくれた家族の存在が、リヴにとってとても大きな力になっていると思った。

私はこの本を読んで、どんなに少数で小さな意見でも、発信していくことの大切さを学んだ。また、苦しい立場にあるときの周囲の支えは大きく、私もそういうときにそばに寄りそえる存在になりたいと強く感じた。そのために、自分の持っているものと違っていたとしても、広い視野をもち、相手の立場に立って考えられる優しさをもちたい。誰もが平等に自分らしい自分で生きていくことのできる社会の実現を心から願っている。